

# 日本文化と禅

両忘庵釈宗活老師の短歌（一）

『六道游戲集』より

……………堀井 妙泉

在りし日の句友たち（二）

……………淵上 磊山

石州流の成立とその特色

……………小田 守琮

雙峰庵山口夕靄老師遺句抄

忘れ得ぬ言葉……………山口 夕靄

風炉先屏風……………立田 珠月



# 両忘庵釈宗活老師の短歌（一）

『六道<sup>ゆげ</sup>游戲集』より

堀井 妙泉

猛暑の続いた今年（平成22年）の夏、擇木<sup>たくぼく</sup>道場において「禅フロンティア」の短歌・俳句のフォーラムがありました。その時の決まっていた講師のご都合がつかなくなり、急遽<sup>きゅうきょ</sup>、不肖私が両忘庵釈宗活老師の短歌を鑑賞させていただくことになりました。

歌の鑑賞に入る前に、両忘庵老師のご行履<sup>あんり</sup>（注1）を簡単にご紹介いたします。

老師は明治3年東京麹<sup>こうじまち</sup>町の開業医の四男としてお生まれになり、昭和29年に世寿85歳で遷化<sup>せんげ</sup>されました。20歳の時、鎌倉の円覚寺の今



両忘庵釈宗活老師

北洪川禅師に入門され、釈宗演老師<sup>もと</sup>の許で得度され、29歳で大事<sup>りょうひつ</sup>を了畢し、輟翁<sup>てつおう</sup>の号を授かっておられます。

この頃より 寺に修行に来る居士、禅子の面倒を見ておられ、師命により「両忘会」という居士禅を再興、大正3年に現在の擇木道場を建設されました。昭和14年古希を機に、後のことを耕雲庵立田英山老師に託され、兵庫県多田村に隱棲、後世に残る<sup>いんせい</sup>絵画や歌などを作られる<sup>ゆげ</sup>遊戯三昧

の生活に入られたのであります。

今日は、『六道游戯集』(注2)の「色の巻」から短歌10首を選び鑑賞したいと思います。道眼(注3)未だ暗く、道力(注4)未熟な私には、もとより老師の境涯などは到底覗き知ることはできず、真面目を損なうことと存じますが、再三再四熟読することで、歌の生き活きた面目を拝し、一句一言に老師の大慈大悲を感ずること切なるものがありましたので、皆様のご指導をいただきながらご紹介したいと思います。

『六道游戯集』をもう少し詳しく言いますと、釈宗活老師は、晩年兵庫県多田の山村 残夢荘般

若松下(注5)に隠棲されました。その時に禅余の妙技としておられた書、絵画、詩歌、彫刻、陶器の製作三昧に遊戯されました。その作品のあまりの素晴らしさに感銘された耕雲庵老師が、『六道游戯集』と名付けて刊行されたものであります。

耕雲庵老師のご褒詞に【忙中閑を得て、端坐以って繻く時は、一は以って己が修養の資糧となり、一は以って日本文化の粹美を味ふべく……】と申されております。編纂は色の巻、聲の巻、香の巻、味の巻、觸の巻の5巻に生まれ、どの頁にも兩忘庵老師の妙技が光を放ち、書や彫刻、陶芸など達人芸はもとよりのこと、源氏物語54帖のうち、花の宴の巻、葵の巻、若紫の巻、紅梅の巻、須磨の巻、明石の巻の和歌や、略画など妖しく繊細なタッチで描かれ、息を呑むばかりでした。今回選出しました短歌にも、源氏物語の雅な香りが裏打ちされております。

短歌は全巻を通して200首以上あり、全て変体仮名で書かれておりましたが、現代人は読めないという声もありましたので、恐れながら現代仮名に変えて、鑑賞させていただきます。



〔『六道游戯集』より〕

うちよする音はきかねど白雲の波間に舟のわがすまゐかな  
 (昭和16年春、霧いとふかき日、わが山舟居をよみて)

打ち寄せてくる波の音は聞こえないが、次々と押し寄せてくる白雲の波間に、寄る辺もなく漂う小舟のような私の住居である、と詠まれています。山棲<sup>す</sup>みの個の生活に引きつけ、前の見え<sup>さき</sup>ない状況を、海原に揺れる小舟に比喻されていますが、詞書<sup>ことばがき</sup>にもありますように昭和16年とは、どのような時代だったのでしょうか。歌は時代背景が加わることで更に空間的広がり<sup>うた</sup>と深みが出てきます。当時の時代を概略的にみても、昭和14年には第二次世界大戦が勃発し、第二次近衛内閣の成立、そして日独伊三国同盟の調印のもとに、昭和16年12月8日太平洋戦争へとなだれ込んでいきました。その前年の昭和15年には紀元二千六百年という盛大なお祭り騒ぎがあり、老いも若きも ああ一億の血が燃ゆる…… と唄いながら日の丸の旗を掲げ、街中練り歩いた光景が記憶にあります。大戦争がはじまる前年に何故お祭り騒ぎなのか不思議でしたが、泥沼化した日支戦争も3年目に入り、リベラルな思想、活動は弾圧され尽くし、国家総動員法で軍需生産第一となり、主要食糧は配給制度となって、自由のない軍国主義横行の時代に入りました。そのような理不尽を精神的に正当化するために、紀元二千六百年の祝祭を派手に打ち上げたといわれています。

このように国内も国外も常軌<sup>じょうき</sup>を逸<sup>いつ</sup>し、狂気に向かっている時、禪者としての内面はどのように動かれ、短歌という器にどのような境地が盛られていたのか、大変興味のそそられることでありました。前の歌に戻りますが、刻々と変貌していく時代の波に漂いながら、楽しみも、苦しみも正受してこれを味わい、如何なる逆境に立っても「亦風流じゃワイ。」と平然<sup>にちにち</sup>と日々是れ好日<sup>こ こうにち</sup>(注6)の日送りをしておられたことが窺<sup>うかが</sup>われる歌であります。

夕立の降りそこねたる<sup>みなづき いお</sup>水無月に<sup>うくいす こえ</sup>庵ちかくなく 鶯の聲

(7月なかばといふに、なほ鶯の聲しきりなるままに)

上句は風がなく、蒸すように暑い鬱陶しい<sup>うっとう</sup>空氣が流れています。降りそうで降らないどんよりとした重い状況を吹き飛ばすように、鶯の<sup>たま</sup>珠の美声が下句に据えられて、限りなく透明な清涼感が表現されています。鶯を対象的に聞いたのではなく、鶯と一体となって、主客未分(注7)のこの一瞬のいのちを謳歌<sup>おうか</sup>しておられ、「明暗双双底」の境地(注8)が巧<sup>たく</sup>まずして表れているように思います。(水無月は旧暦7月)

待ちわびし心知りてや<sup>いお</sup>庵近く訪れて鳴く初ほととぎす

(多田山居 初めて杜<sup>ほととぎす</sup> 鶉をききて、七十二翁)

どのような環境にあっても夢を失わず、わくわくした好奇心と若々しい感性の溢れる<sup>あふ</sup>歌であります。私の待ち侘<sup>わ</sup>びている心を知っているように、訪れて声を聞かせてくれますと、初めて訪れたほととぎすと合一し、<sup>いのち</sup>生命と<sup>よろこ</sup>生命の応呼の<sup>ほめ</sup>歡びが伝わってきます。どことなく相聞の熱<sup>ほめ</sup>きを感じさせ、景と情が一つに溶け合い、まさに啐啄<sup>そったく</sup>同時(注9)の趣のある歌です。

山媛<sup>やまひめ</sup>のおくりものかや草の庵<sup>いお</sup>も錦をまとふ庭のもみぢ葉

(この秋庭前の紅葉わきてうるはしままに)

秋もいよいよ深くなり、寂<sup>さ</sup>びれた庵のまわりも、彩<sup>いろ</sup>とりどりの紅葉で華やかな錦をまとっているようであり、それは山媛<sup>やまひめ</sup>の贈り物かもしれないと詠まれています。山媛とは山を守り、山を<sup>つかさど</sup>司る女神の



ひと年を遠きいで湯に旅寝して帰るさりする心地しにけり(注10)  
 (多田残夢莊新築 住山一年を過ぎてよめる、七十三翁)

多田の山村、残夢莊に隠棲されてから1年が過ぎ、戦時下の事ゆえさぞやご不自由な生活を送られたことと思われませんが、そのようなことにはいささかも執とらわれず、製作三昧に打ち込み、一日一日を寝食を忘れる程、充実した時間を過ごされております。耕雲庵へんさん老大師の編纂された『六道遊戯集』のはしがきにもありますように、【禅余の妙技を奮とって製作三昧に遊戯し、刀を執とっては楽しみて老いを知らず、筆ふるうを揮ふるては寸陰を惜しみて食を忘れ給ふ。】とありますが、彫刻の刀を執れば、彫刻三昧になって生き生きと燃え、筆を揮て書に向かう時は筆と一体となり、寸暇も惜しんで食事も忘れるほど没入の日々を送られたことがわかります。

ひと年を遠きいで湯の歌は静かな山間の温泉にゆったりと遊山ゆさんして、心身生き生きとリフレッシュしたようだと詠まれています。何の製作によらず、作品を生み出すことは苦しみを伴うものでありますが、この歌からは苦しみはおろか、いで湯に遊山したあとのように、爽やかな心情が吐露されています。何故なのでしょう？ それは三昧力からくる絶大な道力の働きから、知らず知らずに生まれる爽やかさが示唆された歌だからだと思います。

去る5月本部道場において、葆光庵ほうこうあんしゆんたん春潭総裁老師のご提唱にもありましたように、後期の数息観三昧が本当に身に付いていなくては、



ひと年を  
 (『六道遊戯集』より)

このような活き活きとした働きはできないのだと、痛感させられる一首であります。 (つづく)

(平成22年6月26日、禅フロンティアの講話より)

### 編集部注

(注1) 行履：禅宗で、日常の一切の行為。

(注2) 六道：書・画・詩・歌・彫刻・陶器の六種類の技芸道をいう。

游戲：「遊戯」に同じ。

(注3) 道眼：真理を把握する眼。

(注4) 道力：真理どおりに実行する力。

(注5) 般若松下：草庵の上には老松が枝を広げている。その松風の音は、万物を貫いている根本の真理を説いているとの意。禅語では古松般若を談じ、幽鳥真如ろうを弄ろうず という。「般若」は、悟りの智慧。

(注6) 日々是れ好日：「好日」は、めでたいよい日。順境であれ逆境であれ、自己が随所に主人公となって楽しい日送りをする。晴れてよし曇りてもよし富士の山 元の姿は変わらざりけり という、悠々自適の境涯。

(注7) 主客未分：主観(我)と客観(鶯の声)が一枚に合一した状態。

(注8) 明暗双双底：明と暗が表裏一体であり、一切の現象が互に対立せず、とけあって自在な関係にあること。

「明暗双双底」の境地：さっぱりして俗気をすっかりのぞいた境界であり、鳥も人間も究きゅうきょう 竟きょうまでつきつめていくと、別物ではなく一つであるという感慨。

(注9) 啐啄同時：鶏が卵から雛ひなをかえすとき、雛は殻をつついて合図をし、親鶏はこれに応じて殻をつき破る。雛と親鶏の呼吸が合わないと、殻はうまく割れず雛は無事にかえらない。そのように、教育の効果を上げるには師弟間の呼吸の合うことが重要だという例えとして、禅家で強調された。

(注10) さり：副詞「さ」に動詞の「あり」の付いた「さあり」が音変化したもの。そのとおりである。そのようである。

## 著者プロフィール



堀井妙泉（本名／美鶴）  
昭和3年、函館市生まれ。歌人。新壘賞、北海道歌人会賞、北海道新聞短歌賞、日本歌人クラブ北海道ブロック賞受賞。平成2年より同人歌誌『英』編集発行人を務める。昭和44年、人間禅芳賀洞然老師に入門。現在、人間禅師家分上。庵号／蓮れんしやう 昌庵。

## 日本文化と禅

## 在りし日の句友たち（二）

淵上 磊山

小林窓翁居士

平成7年3月28日帰寂（享年82歳）

明治生まれながら大変お元気で、高校では数学を教えておられました。暇な時間には、幾何の問題を解いているのが一番のリラックスだと仰おつしゃっていました。当時道場長でありました滄溟庵老居士が、老大師を戒師として結婚式をされました際の仲人でもあります。長年の豊富な登山の経験がおありで、いつも貴重なアドバイスをいただいておりますが、俳句にも多くの山歩きの作品が見られます。



小林窓翁居士

あせびつつじ燃えて九重の夏来る	窓翁	(昭44)
うなみ子よ母の <sup>ひつぎ</sup> 柩の雪払へ	"	(昭47)〔注1〕
教へ子も我も老いたる <sup>ろばた</sup> 炉端かな	"	(昭47)
北鎌尾根彼の岩壁を登り来し	"	(昭48)
<sup>やり</sup> 槍小屋の高さ遠さ <sup>ただ</sup> よ唯登る	"	(昭48)

槍ヶ岳への登山は74歳であったと思いますが、その気力・脚力に驚かされます。

足弱の妻を待ちをり春の雨	窓翁	(昭48)
秋風の今日吹き初 <sup>そ</sup> めて <sup>ちょう</sup> 蝶流る	"	(昭48)
<sup>つよしも</sup> 強霜や大気煙れる <sup>たばるざか</sup> 田原坂	"	(昭49)
<sup>ひとふたり</sup> 人二人花に待つなる山の駅	"	(昭50)
<sup>ちみじやま</sup> 紅葉山湯滝に立てる妻若し	"	(昭51)
<sup>そうきゅう</sup> 蒼穹や真紅に生れし <sup>あ</sup> 烏瓜 <sup>からすうり</sup>	"	(昭51)
元旦の木の間にありし三の岳	"	(昭51)
断崖 <sup>あえ</sup> に喘ぎ着きたり <sup>ばんかこう</sup> 晩夏光	"	(昭51)
恋人も <sup>おうな</sup> 媪となりぬかきつばた	"	(昭52)
幾山河越えて八十路や富士の汗	"	(昭54)
帰去来の君 <sup>すて</sup> 已に亡し山の霧	"	(昭57)〔注2〕

日頃は飄々<sup>ひょうひょう</sup>として至極<sup>まじめ</sup>真面目、話せばにこやか自然体、恋人だった奥様への心配りも、そのままさらりと詠まれておりました。

緒方令琳<sup>れいりん</sup>禅子

平成17年7月21日帰寂(享年78歳)

昭和56年に亡くなられた中川千巖居士の妹であります令琳さんが入



緒方令琳禅子

門された時、ちょっと驚きでしたが、よくぞ御兄妹とその純真さに心打たれたものでした。

小学校長を退職されたご主人と過ごされる日々の中、支部行事には熱心に参加されていました。ところが、その元気なご主人が、突然大変な難病にかかり、自宅療養を余儀なくされ、生活が一変したのです。

以後、令林さんは介護に専念されることになり、支部行事でお会いすることもなくなりました。回復の見込みの薄い病床のご主人と、介護される令琳さんお二人の明け暮れが続くことになりました。ある時、道友の一人が気分転換のもと、俳句会への投句を誘ったものでした。これをきっかけに俳句を詠む気分になられたのでしょうか、次第に投句されるようになりました。

何の銜<sup>てら</sup>いも計らいもなく、感慨をそのまま綴<sup>つづ</sup>られた、令琳さんの介護の日々の句をお読み下さい。

言の葉を失くせし夫や村時雨	令琳	(平14)
わが心荒ぶる日あり冬野原	"	(平14)
せめてもと猪口一杯の今朝の春	"	(平15)
ただいまと言へば病夫笑む夜半の春	"	(平15)
夫細り形のま <sup>ぶ</sup> まや夏蒲団	"	(平15)
うたかたの初恋にも似たり遠花火	"	(平15)
一株の白菜漬けて豊かなり	"	(平15)
今日も又病夫の看護や寒き朝	"	(平16)
病夫よたて病夫よ歩けや春うらら	"	(平16)

お見舞いの言葉うれしや釣忍<sup>つりしのぶ</sup>

令琳 (平16)

ここで、句会への投句はぷつりと途絶えてしまいました。この5月に自らの身体に変調を覚えて診察を受けられたところ、何ということでしょうか、癌<sup>がん</sup>に侵されていることが解ったのです。ご夫婦して病床<sup>ぶ</sup>に臥されるようになったのです。

この間の消息に詳しい支部の禅子中村慈光さんはじめ、道友の励まし、祈りも空しく、翌平成17年7月ご主人の御逝去、そしてその1週間後には、後を追うようにして令琳さんも幽冥<sup>ゆうめい</sup>の世界へ旅立たれました。3年間の短い期間でしたが、俳句に親しまれたことで ご苦勞もいくばくか癒されたことも あったのではないのでしょうか。

御命<sup>みようじゆう</sup> 終の前に、いかにも明るい令琳さんらしい一句を残されました。

この一日生きるよろこび梅かほる

令琳 (平17.5)

小沢荷風居士

平成17年8月31日帰寂(享年81歳)

熊本医大で同期生として過ごされた青嶂庵古幹老師・一行庵義堂老師共々第1回撰<sup>せん</sup>心会<sup>しんえ</sup>にて入門され、草創期の御苦勞を体験された一人であります。勤務医としての経験が長く、その後県南の地に開業されました。お陰で我々は同地方の猪<sup>いのしし</sup>料理や白魚漁などを一緒に楽しませていただきました。



ただし晩年は病気がちで、残念なことに俳句を拝見することも少なくなりました。

小沢荷風居士

雲の峯有明海に釣らんとす	荷風	(昭46)
懸命の淡き光を蚩かな	〃	(昭47)
回診の襟を正して今朝の冬	〃	(昭50)
老人の薄暑 <small>はくしょ</small> の愁訴聞く外なし	〃	(昭50)
春の日や夢ささやかに当たり籤 <small>くじ</small>	〃	(昭54)
秋興 <small>しゅうきょう</small> の一日や暮るる寝積 <small>ねじ</small> 迦岳 <small>かだけ</small>	〃	(昭55)
往診の傘もささずに春の雨	〃	(昭57)
豆飯や母に似て來し妻の味	〃	(昭57)
菊の香や釘打ち <small>あ</small> 敢えず父の棺	〃	(昭58)
火葬して菊あとかたもなかりけり	〃	(昭58)
鳥帰る抑留されし友いづこ	〃	(昭58)
春の宵聞こえぬ母と筆談す	〃	(昭58)

せいしゅうあん

青嶂庵荒木古幹老師

平成19年1月25日歸寂(享年82歳)

青嶂庵老師御歸寂の後、ご遺徳をしのぶ追悼集が同年5月発行され、



青嶂庵荒木古幹老師

また荒木家から遺稿集『正楽和』が私共団員にも贈られまして、そのご業績並びに人となりをつぶさに知ることができます。ただ老師は早くから「牛歩」の俳号で作句を続けておられましたが、上記2集だけでは、その全貌を拝察することができませんでした。

老師の俳句作品の一部は、ご生前に時々拝見しており

ましたが、その全容についてはよく承知しておりませんでした。その後院内文芸誌『きぼう』に毎月3句ずつ掲載発表されていたということを知り及びまして、老師身边に深く関わっておられた三光庵老居士にお願いして、その俳句を摘記していただきました。膨大な句数のほんの一部になりますが、ここに紹介させていただきます。

熊蜂に蜜を譲りて蝶 <small>ちよう</small> 軽し	牛歩	(昭46)
竜胆 <small>りんどう</small> を持って親爺 <small>おやじ</small> は阿蘇路より	〃	(昭47)
南天のひとつきわ赤き今朝の雪	〃	(昭50)
蝉 <small>せみ</small> 鳴くや心の石 <small>い</small> に入る入 <small>い</small> らず	〃	(昭51)

昭和46年4月、熊本道場落慶式が挙行されました。

昭和49年、青嶂庵の庵号を授与され、識大級へ進級されました。

昭和50年、熊本支部担当師家しけを拜命されました。

小 <small>ち</small> さき花 <small>ちい</small> 小 <small>ち</small> さき蕾 <small>ち</small> 小 <small>ち</small> さき梅	牛歩	(昭53)
手土産はあけび一枝と山の水	〃	(昭58)
無月にも花あり酒あり友ありて	〃	(昭61)
秋天を抱いて五右衛門風呂にあり	〃	(昭63)

秋は恒例の観月会を、そして耕雲庵英山老大師ご在世以来の五右衛門風呂と、道場での明け暮れがそのまま詠まれております。

終夜灯 <small>つ</small> 点きてわびしき冬の暮	牛歩	(平1)
七草を子にも孫にも説きながら	〃	(平4)
さかしまになりて鶉 <small>つくみ</small> の椿 <small>つばき</small> 吸ふ	〃	(平4)
花散るや先師の遺作名は「花びら」	〃	(平4)

<花散るや>の句に「花びら」とあるのは、老大師作品集によりますと、盃名<sup>はいめい</sup>「落花」ではないかと推察されますが、盃底に点々と白い花びら模様があり、これで一杯傾けられたことでありましょう。

ぼうたん 牡丹や先師の喝と慈悲の目と	牛歩	(平10)
ぼうたん 牡丹や先師の遺影 <sup>ほほえ</sup> 微笑めり	〃	(平13)
白梅や先師の若き筆の軸	〃	(平14)
しゅんかん 春 寒や先師の軸の優しかり	〃	(平14)

毎年4月末から5月初めにかけて、本部道場では諸行事が行われておりますが、総裁としてこれ等に臨まれる時 老師は老大師を<sup>しの</sup>偲べれること切なるものがあつたのでありましょう。

蝉 <sup>ちやせん</sup> しぐれ茶筌の動き自づから	牛歩	(平2)
どんどやに <sup>こそ</sup> 去年の茶筌を五つ入れ	〃	(平6)
初釜や古き <sup>おおひ</sup> 大樋 <sup>へらさば</sup> の筧 <sup>さ</sup> 捌き	〃	(平11)
熊蝉や釜鳴りの音消しにけり	〃	(平13)
熊蝉に合はせ茶筌を振りてをり	〃	(平15)
ふうろ <sup>ふろ</sup> てまえ <sup>てまえ</sup> 屏風は窓辺の花ざくろ	〃	(平17)

こよなくお茶を愛し、自ら深くお茶の道を修しておられました老師の明け暮れが偲べれます。

霜柱踏むやこの道果つるまで	牛歩	(平8)
---------------	----	------

平成8年5月、人間禅第四世総裁に就任されました。<この道果つるまで>とまさに決意の一句を詠まれております。

頬赤く古老阿蘇路の雪便り	牛歩	(平6)
エーゲ海望む遺跡や虫の声	"	(平7)
万作や痴呆老女と童歌	"	(平10)
花御堂浄も不浄も老若も	"	(平12)
三昧の書見を割きし秋の雷	"	(平12)
冬満月底光りして新世紀	"	(平13)
桜桃忌青春の業罪深く	"	(平13)
はかなくもハクモクレンのはかなくも	"	(平14)
希望激動包みしままに去年今年	"	(平14)
名月を見よと老妻声高に	"	(平14)
北風や病む身の芯を刺す如く	"	(平15)
着ぶくれて古美術店に微笑翁	"	(平15)
古備前に梅一枝の香りかな	"	(平15)
山茱萸や膝かばふ妻と金婚に	"	(平16)
寝言云ひつ夢見る老ひし妻の春	"	(平16)
薄き雲十五夜の月そこなはず	"	(平17)
刻みつつ傘寿の年を終らむと	"	(平17)

雪便り・旅・痴呆老女・冬満月・桜桃忌・梅・病・金婚・老妻  
 日々公私にお忙しい中、悠々と句作りを楽しみ、傘寿を迎えられました。

巖と慈と先師の著書を初読みに	牛歩	(平18.1)
自らを賞めむ四月は八十一	"	(平18.4)
生まれしは見渡す限りの花の頃	"	(平18.4)
梅雨入りを癌病棟より見てをりぬ	"	(平18.5)
大阿蘇の稜線かすか春かすむ	"	(平18.5)
友眠る阿蘇の寝釈迦は霧と雲	"	(平18.8)

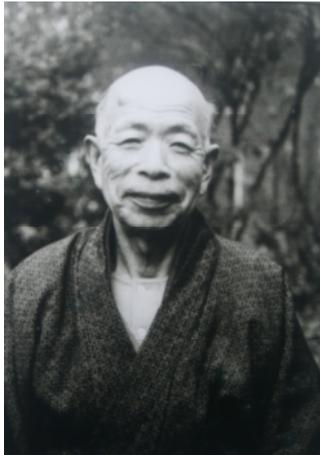
この年8月以降老師の俳句を拝見することはできませんでした。まもなく病状が悪化して入院されたのであります。

俳号「牛歩」そのままに悠々と、念々正念60年。見たまま、感じたまをさらりと楽しみ詠まれた数々の俳句を遺されました。

誰が<sup>た</sup>為<sup>ため</sup>に笑むや椿の千代錦 牛歩 (平17.12)

游雲軒道村古堂居士

平成21年4月4日帰寂(享年88歳)



游雲軒道村古堂居士

第4回撮心会に参加されて以来、嘗々60年修行を続けられた最高齢の古老でした。住居は阿蘇山への登り口、阿蘇駅近くにお住まいでした。役場勤務の傍ら、一時はご商売もされていて、地区に溶け込んだ生活の息吹を、直に伝えてくださる方でありました。

妙峰庵孤唱老師ご健在の時、古堂居士の十八番の肥後琵琶(箆の琵琶をかき鳴らしつつの語りに、ヒッキレベコ、ヒッキレベコの囃子が入る。)に大笑されていた

写真をたいへん気に入っておられたというので、追憶尋思の写真として納めております。

切干の甘き匂ひや日をためて	古堂	(昭54)
早苗饗や最後は老の豊年歌	"	(昭54)〔注3〕
菊白き兵士の墓碑や <sup>そま</sup> 杉の庭	"	(昭58)
猫の子も老も総出や干たばこ	"	(昭58)

初秋や神楽稽古の遠太鼓	〃	(昭60)
大阿蘇 <small>けさ</small> を袈裟 <small>が</small> 掛けの野火走りゆく	〃	(昭62)
新涼や村に流るる朝の鐘	〃	(昭62)
こんにやく芋 <small>けやき</small> 掘る 落葉の降る中に	〃	(昭63)
<small>しょう</small> 笙の音 <small>やしる</small> の流るる社春立てり	〃	(昭63)
水色 <small>はかま</small> の袴揺らして春 <small>ねぎ</small> の禰宣	〃	(昭63)

すぐ近くに西巖殿寺という名刹があり、たびたび句材になっております。こんにやく芋は自ら栽培し、販売もされました。切干大根・さのぼり早苗饗・たばこ干し煙草と郷愁を誘う風物の中で営まれている生活の日々が映し出されております。

<small>はさんしょう</small> 葉山 <small>しま</small> 椒や縞美しく蝶の羽化	古堂	(昭55)
<small>はなぐり</small> 花栗にむせて下草刈り終る	〃	(昭58)
竹 <small>き</small> を伐る音のこだまや秋深し	〃	(昭59)
<small>ぜんえん</small> 禅苑の奥の一隅やぶれ傘	〃	(昭59)
<small>すいれん</small> 睡蓮を縫ひ行く <small>おし</small> 鴛鴦 <small>あお</small> に水蒼し	〃	(昭60)
電柱に縄張り宣すか <small>たけ</small> 猛り <small>もず</small> 鴞	〃	(昭61)
<small>きうきた</small> 喜雨来る庭 <small>なす</small> の茄子苗きつと立つ	〃	(平2)

行事がある度に野の花を採って持参され、野趣を添えていただきました。

<small>はなむけ</small> 長旅に妻 餞の芹ご飯	古堂	(昭60)
着物縫ふ妻の薄肩 <small>ひあし</small> 日脚伸ぶ	〃	(昭61)
畑打ちし妻の背をもむ秋灯下	〃	(昭63)
妻入院春の夕の一人膳	〃	(平2)
梅雨 <small>げた</small> 明くる下駄 <small>くりや</small> からころと厨妻	〃	(平2)

お二人だけでの暮らしの中、共に足腰に支障があり、危惧しておられましたが、生来の明るさと、豊かな人間味、話好きの人懐っこさに魅せられた人々に囲まれて、悠々88年の生涯を全うされたのであります。

はるか幽冥の界に遊ばれる句友たちへ

<sup>はぎすすき</sup>  
萩 芒下露深し禅苑は

磊山

合掌

### 編集部注

青嶂庵古幹老師の俳句は、『合掌』第268号：青嶂庵老師追憶尋思特集号でも紹介されております。いずれも、東京第一支部（現埼京支部）の澤木句会<sup>たくぼく</sup>に投句されたものであります。

窓あけて紺碧 <sup>こんぺき</sup> の空屏風 <sup>びょうぶ</sup> とす	牛歩(平13.11。最初のご投句)
母逝きて秋深まりし母の部屋	〃
ひとひらの花びらつけて帰りたり	〃
空晴れて残月淡く地は青葉	〃
梅雨晴間風一陣 <sup>おご</sup> の奢りかな	〃
爪を切る今日は梅雨明け宣言日	〃
うすき雲十五夜の月そこなわず	〃
旅終えて朝の点前や白むくげ	〃
花牡丹 <sup>ぼたん</sup> 一輪 <sup>い</sup> 活けて茶 <sup>た</sup> を点てり	〃
茶話のなか泰山木の花開く	〃
原稿を重くかかえて二月尽	〃
頬を刺す風に老翁 <sup>かんじ</sup> 莞爾とし	〃(平18.1)
湯疲れて我が家の床に休みをり	〃(平18.2。最後のご投句)

- (注1) うなみ子：髪をうない(うなじで束ねたもの。また、うなじのあたりで切り下げておくもの。)にした子供。元服前の少年。
- (注2) 帰去来：官職を辞し、郷里に帰るためにその地を去ること。中国の詩人陶淵明の『帰去来辞』による語。訓読では「かえりなんいざ」、「さあ帰ろう」の意。
- (注3) 早苗饗：田植えをおえたあと田の神を送る祭りである。九州から四国では「さのぼり」、関東から東北では「さなぶり」といい、他にもいろいろの呼び方がある。各戸で行うところと、村落全体で行うところなどいろいろある。家の神棚に供え物をし、農具を飾って、田植えの結仲間<sup>ゆい</sup>、手伝い衆、早乙女を招いて酒宴をもよおす。これで農家の仕事に一段落がついて、体を休める。

## 著者プロフィール



ふちがみらいざん  
淵上磊山(本名/彌一)

大正13年生まれ。昭和24年、人間禅立田英山老師に入門。現在、人間禅布教師。軒号  
そうみんけん  
/ 雙泯軒。